

今週のメニュー

■[年頭挨拶](#)

塩ビ工業・環境協会 会長 藤井 一彦

■[年頭所感](#)

塩ビ工業・環境協会 専務理事 小野 裕章

■年頭挨拶

塩ビ工業・環境協会 会長 藤井 一彦

あけましておめでとうございます。平素は塩ビ工業・環境協会の活動に多大なるご理解とご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。新年にあたりまして、ひとことご挨拶を申し上げます。

2024年の世界経済は、インフレ圧力が鎮静化するなか金融緩和への転換が進みつつありますが、自動車や産業機械などの製造業の伸び悩みなど、まだ景気回復の力強さは感じられていません。また、各国、各地域の回復ペースもまだら模様となっています。米国のトランプ政権の政策転換により、貿易摩擦や地政学的リスクが高まる懸念されています。

このようななか、塩ビの生産・出荷は、年初は順調な滑り出しを見せたものの夏場にかけて低調に推移しました。後半には、世界経済の動向とともに緩やかに上向いてきたことから、暦年では150万トンレベルになる見込みです。国内では、円安による原料高が製造コストを押し上げるとともに、物価高に伴う個人消費抑制の影響を受けました。また、年始の能登半島地震をはじめ気候変動の影響と目される集中豪雨や洪水が日本列島を襲い、大きな損害をもたらしました。まさに国民生活や地域の経済基盤が大きく揺らいだ1年だったといえます。その一方で高水準の賃上げが2年続いたことや減税等の効果により個人消費が徐々に拡大してきています。また、あらたな政治体制のもとでの総合経済対策によって景気が回復し、上昇していくことが期待されています。特に災害復興を含めた防災・減災・国土強靱化に向けたインフラ整備やサステナブル社会実現に向けた省エネ、脱炭素等の取組みにおいては、塩ビ素材の有用性がいかに発揮され、社会に大きく貢献していくと考えています。

以上のような背景のもと、2024年に当協会が注力して参りました活動の内容と2025年の活動について簡単に紹介いたします。

まず、当協会の活動の大きな柱である広報活動については、2023年より若年層や主婦層への訴求を強化することを方針として取組み、2024年は、それをさらに強化しました。特にSNSを利用したタイアップ広告は、マンガを活用する等の工夫をこらし、従来のHP年間アクセス数をたった2週間で超えるという大きな効果がありました。今後、訴求点を充実させ、継続的に視聴される媒体となるように取り組んでまいります。また、塩ビを使っ

た消しゴム作りという体験型出前授業は国内各地の学校で好評を博し、絶えず引き合いが来ています。東京都中央区の小学校で行われた「子どもとためす環境まつり」においても、全参加団体中で3位の人気を獲得しました。塩ビという「素材」を理解するにも、ワクワクする体験ということの重要性を痛感しました。さらに12月のエコプロ2024には「生活を豊かにする塩ビ」をテーマに、「近所の公園」をイメージしたブース設定により、大人も子供も気軽に立ち寄り、塩ビに触れる体験をしてもらうというコンセプトで出展しました。特に「海水から作られるプラスチック＝塩ビ」として、海水から天日塩、電気分解、塩ビ樹脂、そして塩ビ製品という一連の流れについて写真やパネルだけでなく、実物を展示し、実際に見て、触れて、感じることで塩ビについて正しい理解が得られるように工夫をしました。ブースは初日から盛況で、3日間で約4,000人の来場者がありました。インフラから生活に密着した身近な日用品まで幅広く使用され、社会生活にとって有用である素材としての塩ビは生活のなかの脇役ではなく、表舞台で活躍する主役なのだという意識をもって強くアピールしてまいります。

塩ビを用いた建材用途の関連では、塩ビ開口部建材の普及を通じて2050年のカーボンニュートラル実現に資するべく、省エネ・脱炭素、室内環境・健康を切り口としたPR資料（『カーボンニュートラル建築実現のために』という小冊子）を発売しました。この小冊子については、当協会HPで公表するとともに、10月の記者会見においてカーボンニュートラル検討会の委員長である芝浦工業大学の秋元学部長から概略をご説明いただきました。居住空間において高効率設備を導入する前に、まずは建物の断熱性や遮熱性の向上を図り、暖冷房設備が処理する負荷を削減すること、そのためには熱の出入りが大きい窓開口部の断熱性能及び遮熱性能向上が重要になってまいります。今後、住居の温熱環境を整えることで居住時の快適性（睡眠や健康）を向上させる取り組みに注目したいと考えています。

住宅の高断熱・高気密で省エネに貢献する樹脂窓が普及しつつあります。加えて、世界的にサーキュラーエコノミーの考えが広く浸透し、樹脂窓リサイクルの事業は欧州各国に広がりを見せております。日本においても樹脂窓は、1980年代より北海道を中心に使用されており、今後、これらの使用済み樹脂窓のリサイクルチェーンの仕組みづくりを進めていくことが必要になってまいります。この問題意識の下、昨年1月に産学連携によるリサイクルシステムの実装化に向けた取組み指針としての「樹脂窓リサイクルビジョン」を公表し、9月には社会実装に向けた活動の認知及び理解の拡大等を目的として「第1回樹脂窓リサイクルシンポジウム」を札幌で開催しました。2025年はリサイクルビジョンの実現に向けて大きく飛躍する1年となります。さらに、資源循環向上にとって欠かすことのできないケミカルリサイクルの必要性と重要性がますます高まってくることから、2024年に引き続き塩素循環検討会の取組みを強化してまいります。

最後に、国際活動関係では、塩ビを含むプラスチックに関する大きな動き、すなわち、UNEP（国連環境計画）における「プラスチック汚染に関する条約策定に向けた政府間交渉委員会」への対応が挙げられます。昨年11月末に韓国の釜山で開催された5回目の会議（INC-5）では条約策定の合意を目指していましたが、各国の意見調整が整わず、合意は先送りされることになりました。これまで当協会も日本の対応方針に沿って政府及び関連業界団体と連携し、国内会議で意見陳述や情報提供など積極的に対応してまいりました。今後、本条約策定の合意に向けての協議は継続されますが、引き続き塩ビをはじめ多くのプラスチック製品が社会に対して有用な便益をもたらしていることなど、その価値と必要性を関連業界団体とともに強調してまいります。

昨年の夏の記録的な暑さや豪雨や洪水など気候変動の影響と思しき環境変化はますます大きくなってきています。塩ビ樹脂の優れた性能やマテリアルリサイクル性の高さを最大限に活かしていくことが、多くの難題を解決していくことに貢献し、地球環境改善に寄与するという信念をもって取り組んでまいります。今後も塩ビの有用性や可能性について広く広報し、みなさまのご理解を頂けるように活動を鋭意強化して参る所存ですので、引き続き関係各位のご協力をお願い申し上げます。

最後になりましたが、塩ビ事業に携わっておられる各社の益々のご隆盛と、皆さまのご健勝を祈念いたしました、年頭の挨拶とさせていただきます。

■年頭所感

塩ビ工業・環境協会 専務理事 小野 裕章

新年あけましておめでとうございます。本年も塩ビ工業・環境協会へのご支援、ご鞭撻よろしくお願いいたします。

今年の干支は乙巳（きのとみ）。乙は植物が成長して発展していくこと、巳は豊穰・生命力・再生を意味し、乙巳は再生や変化を繰り返しながら柔軟に発展していく年であるようです。そのようなすばらしい年の始まりに当たり将来に思いをはせて、日本のみならず世界が模索する循環経済社会（サーキュラーエコノミー）について私の考えを述べさせていただきます。

理想的な循環経済社会実現に向けて最も重要なのは「もったいない」をとことん追求すること、だと思っています。使い捨てや短寿命だともったいないので、丈夫で長持ちであってほしい。長く使った後もリサイクルで再生したり、リユースで引き続き使ったり、アップサイクルで機能を付与して新たな製品として生まれ変わらせたりすることにより限りある資源やエネルギーを大切に使いつつ豊かな生活を実現したい。フードロスをなくすために、食料品が長持ちするようにしたい。「ゴミ」という概念をなくし「ゴミ」だったものも資源、あるいはエネルギー源として再生したい。リサイクル・リユースできなくなったものも「もったいない」ので何か別の用途で使えないかを徹底的に考えて有効活用したい。こういった「もったいない」という思いを製造者・流通業者・研究者・消費者等さまざまな人々が共有し、「もったいない」ので無駄遣いを避けるためにいろいろと努力し創意工夫し取り組んでいくことが大切だと思います。

また、「もったいない」をとことん追求するために考慮すべき事は、資源とエネルギーをトータルで考えて全体最適を目指していくことかと思っています。つまり、資源循環に腐心するあまり多大なエネルギーをかけてしまうのではなく、適当なところで資源を燃料として使いエネルギーに転換、すなわち今行っているごみ発電のような仕組みでの利用も含めてトータルで資源ミニマム、エネルギーミニマムになるように考えていくことが肝要です。

理想的な循環経済社会形成に向けて、手前味噌ながら塩ビはいろいろな場面でお役に立てる優秀な素材であると考えています。

塩ビの長所の一つめは省資源の素材であるということです。塩ビは海水を天日干しで 2～3 年かけて得られる塩由来の塩素が重量の 6 割を占めます。他のプラスチックと比べて石油や天然ガスといった化石資源の活用が少なく済みます。

塩ビの長所の二つめとして長寿命（耐久性がある）が挙げられます。上下水道や農業用灌漑に使用されている塩ビパイプの寿命は 50 年以上といわれています。使用した後は回収・リサイクルされて、再び塩ビパイプや他の塩ビ製品の素材として生まれ変わります。

塩ビの長所の三つめが断熱性。既存住宅での省エネルギーフォーム、ハウスメーカーにより売り出されている ZEH（ゼロ・エネルギー・ハウス）のカギとなる製品として普及が進んでいる塩ビ製樹脂窓。政府もカーボンニュートラル社会実現に向けて不可欠な製品として補助金を用意してその普及を後押ししています。気密性をよくしてエネルギー効率の良い、すなわち少ないエネルギー使用で効果的な冷暖房を行い、快適な住環境の実現に塩ビは寄与しています。もちろん、塩ビ製ですので丈夫で長持ちもします。また、樹脂窓使用後のリサイクルの仕組みづくりも現在北海道を中心として進みつつあります。

塩ビの長所の四つめはガスバリア性。この性質によって例えば、塩ビラップフィルムで細菌の繁殖を防ぎ食品を長持ちさせたり、おくすりシートや血液パックなど医薬品分野で活用されることにより薬などの品質を長く保ったりすることができます。おくすりシートに用いられている塩ビのリサイクルについてはアルミと塩ビの分離といった技術的な検討は完了し、商業ベースでの仕組みづくりが進みつつあります。

塩ビの長所の五つめは難燃性・絶縁性や耐薬品性。燃えにくく自己消火性があり電気を通さない、また、酸やアルカリに強いという性質がありますので、電線被覆材、クリーンルームや半導体製造装置等で用いられています。電線被覆材として用いられている塩ビも一部リサイクルされていますが、循環経済社会構築検討の中で今後回収・リサイクルの社会的仕組みができていくことを期待しています。

その他、塩ビの長所として挙げられるのはパイプや樹脂窓といった硬質のものから、床材、タイルカーペット、農業用フィルムやテント倉庫といった軟質のものまで硬さを自由に設計でき、変幻自在といったところです。またリサイクルの際にも同じ製品へのリサイクルもできますが、例えば、壁紙で使用されていた塩ビを床材として用いる、塩ビシートからバッグにアップサイクルするといった異なる製品への展開もできます。

汚れや異物混入でマテリアルリサイクルが難しくなった廃塩ビについてはケミカルリサイクルという手段が検討されていますが、最近このような廃塩ビの新たな活用法が見出されました。廃塩ビを塩素源として投入・活用して放射性物質とその他の物質を分離するという手法です。この手法を用いて福島第一原発事故後の除染作業に伴う「放射性物質を含む廃棄物の減容化」が進んでいます。

このように塩ビは省資源、長寿命でありリサイクル性に富み、リサイクルできない状況になっても別の用途で社会のお役に立てる、「もったいない」精神を遺憾なく発揮できる素材だと思っています。循環経済社会実現への歩みの中で塩ビ（製品）のより一層の活躍、新たな活用の場の広がりを期待しています。

末筆ではございますが、塩ビに関係する方々、メルマガ読者の皆様方の益々のご発展とご健勝、そして令和7年が皆様方や塩ビ業界にとって素晴らしい飛躍の年となることを心より祈念いたします。

■ 関連リンク

- [メールマガジンバックナンバー](#)
- [メールマガジン登録](#)
- [メールマガジン解除](#)

※本メールマガジン上の文書・画像等の無断使用・転載を禁止します。



■ 東京都中央区新川 1-4-1

■ TEL 03-3297-5601 ■ FAX 03-3297-5783

■ URL <http://www.vec.gr.jp> ■ E-MAIL info@vec.gr.jp
